

いのちをつなぐ越冬支援

——レバノンでの活動

例年よりも寒いこの冬、1月にはシリアからレバノンへ峠を越える途中で16人のシリア難民が凍死したという事件が大きなニュースとなりました。父親に会いにシリアからレバノンに向かう途中だった家族は、母親と兄弟が死亡し3歳の女の子だけが生き残ったそうです。

2011年に起こった民主化運動はシリア内戦へと発展して、500万人のシリア難民がトルコ、レバノン、ヨルダン、イラクに流出。ヨーロッパに移動した人や、国内で転々としている避難民も約600万人いると言われます。

レバノンには約100万人が流入し、総人口の3人に1人は難民という状況が生まれたなか、私たちは2013年よりレバノンでのシリア難民支援を続けています。特にシリアから避難してきたパレスチナ難民（元々パレスチナを追われ難民としてシリアに逃げた人たちで、シリア内戦の影響で隣国レバノンに再難民となった）数万人を対象にしています。シリアから逃げて来たパレスチナ難民は2013、14年ごろには10万人ほどいましたが、最近では3～4万人に減ったといわれます。レバノンでの生活が非常に過酷なため、多くの人が海外に渡ったり、少し落ち着いた時期にシリアに帰ったりしているためです。

1万人近くが暖をとれた

今年も内陸部の高原地帯、冬には積雪1メートル以上、氷点下10℃以下に下がる大変寒い地域での支援を実施しました。米国のトランプ大統領が1月に国連パレスチナ難民救済事業機関（UNRWA）への支援を減らすという声明を出し、現地には衝撃が走りました。しかしその前から、UNRWAの支援は減り続けています。2016年は、越冬支援として一世帯当たり約1万円が5か月間出たのですが、2017年には一世帯当たり約7千円が3か月間出ただけでした（1か月に必要な灯油代だけでも2万円近くになります）。原野に建てられたテント生活をしている家族も多く、暖を取るための燃料は死活問題です。そんな中で、当会では燃料支援を1,550世帯に行いました。引換券を配布して近隣のガソリンスタンドで灯油を受け取ってもらいます。遠方に住んでいる人には給油車を回しました。当会の場合も予算が減っている中で、今



点在する難民世帯に、給油車で灯油を配布



配布物資を取りに来た人たち。口々に生活の厳しさを訴える



防寒着を受け取った幼稚園児

年の燃料支援は2、3週間分にしかありませんでしたが、それでも約1万人の人たちが暖を取ることができたと思っています。

また十分に食事をする機会がない家庭が多いので食糧を配布しています。米、レンズ豆、大豆、チーズ、パスタやオイル、砂糖、ツナ缶、お茶など現地の日常食品です。燃料配布にも食糧配布にも大勢の人たちが詰めかけ、こうした支援に多くの人たちが頼っていることを実感

ある家族のこと

高原地帯の農場脇に建つバラック小屋で、3年前にシリアから避難してきた家族に会いました。8人の子どもがいますが、父親は心臓発作の後遺症で発語障がいがあり、母親も寝たきりです。コンクリの上にビニールゴザを敷いただけの床、壁や天井はベニヤ板で窓には国連が配ったビニールシートだけ。訪問した11月はすでに寒く、子どもたちの半袖が痛々しかったです。地主の厚意で家賃は払っていないものの、電気代に月6,000円もかかります。子どもたちは2名をのぞいて通学して

いません。通学している3年生の女の子も授業についていけず、同じ学年を3回繰り返しています。家族の多くが「地中海性貧血」という風土病にかかっていて、2人の子どもが亡くなったなど、本当に大変そうな家族でした。



しました。レバノンでこの人たちは、職につくことを許されません。

この冬も小学生や幼稚園児約800人に防寒着配布をしました。それに加えて、山間部のUNRWAの小学校で1年生から6年生に600人に、日本のファーストリテイリング社から寄贈されたユニクロ製品を配布することができました。レバノンにはない高機能の衣類は好評です。こうした衣類で子どもたちが暖かな冬を過ごすことができました。

物資配布のほかに、幼稚園と補習クラスでの子どもの受け入れ、給食提供、子どもたちのストレスを減らすための様々な活動などの教育面での支援、また児童精神科と子ども歯科などの医療支援、母親向けのワークショップなど女性のための支援も継続しています。

内戦が終わるめどは立たず、避難生活がすぐに変わらないなら、少しでも家族が楽しく過ごせるようにと皆さん工夫をしています。夫が行方不明とか、息子がシリアに残っていると、治療費が払えず病気が悪化したとか、どの家族もそれぞれ悩みを抱えています。隣近所で助け合いながら避難生活を送っているのです。

水泳選手になって難民を助けたい

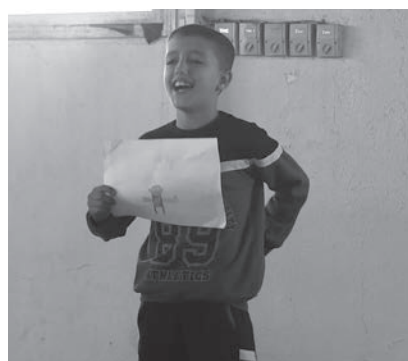
シリア内戦が始まって今年で7年、子どもたちもどんどん大きく成長しています。ブルジ・バラジネキャンプの補習クラスに兄と通っている9歳のハムザくん。将来の夢は水泳選手になることです。「水泳選手になって、海で溺れた難民の人たちを助けたい」から。ハムザくんも家族と一緒に、シリアからレバノンに来た子どもです。補習クラスでは、子どもたちが将来の夢について話し合いました。兄のアブデルアジーズくんはエンジニアになりたいそうですが、先生やお医者さん、歌手など、子どもたちの夢は広がっていました。生活の変化や厳しいレバノンでの生活の中で、子どもたちも様々な思いを抱えています。多



国連の学校でユニクロ製品を受け取る



初めて食べたハンバーガーにかぶりつく



水泳選手になった絵を描いたハムザくん

くの子どもがシリアに帰りたと言っていますが、物心ついたときからレバノンで育った子どもたちにとって、シリアはお話の中の存在になってしまいました。

(レバノン事務所)